

訪問国活動の成果



訪問国活動

ねらい

航海中に実施される訪問国活動を通じて、以下の点を学び、身に付けることが期待された。

- 表敬訪問やレセプションなどの公式行事を通して、国際儀礼（プロトコル）を身に付ける。

- 各種施設を訪問し、その地域における文化や歴史、社会情勢について学びを深める。

- 大学における現地青年とのディスカッションを通じ、国際理解を深め、国際親善を図る。

インド（コチ）

2月11日(日)	
9:00	コチ港入港
9:00 - 11:00	入国手続き 管理部・受入国政府・大使館・SWYAA 代表者ミーティング
11:00 - 11:45	SWYAA インドによるオリエンテーション
12:40 - 14:40	昼食（ケララ州政府主催） 表敬訪問（管理官及び各国 NL）
15:15 - 16:30	フリータイム
17:00	帰船
19:00 - 21:00	船上レセプション
2月12日(月)	
9:00	出発
10:00 - 10:45	コチ科学技術大学訪問
11:00 - 12:30	・全体会（大学概要説明）
12:30 - 13:00	・コース別ディスカッション
	・全体会（振り返り）
13:00 - 14:30	昼食（大学にて）
14:30 - 15:00	・着替え
15:00 - 16:30	・ミニ NP とギフト交換
17:00	大学出発
19:00 - 21:30	インド政府主催晩さん会

2月13日(火)	
9:00	出発
10:00 - 12:00	課題別視察 - SHG Kudumbashree - Snehanilayam Special School - Don Bosco Sneha Bhavan - ENS Kalari Centre - Adarsh Charitable Trust - Kerala Kathakali Centre - Amrita School of Business - Kerala University of Fisheries and Ocean Studies (KUFOS)
13:00 - 14:30	昼食
	帰船
16:00 - 18:00	出国手続き
18:00	出航

2月11日午前9時、コチに入港した。入港後、埠頭にて歓迎パフォーマンスが行われ、入国手続きを行う参加青年に歓迎の花輪が掛けられた。入国手続き後、ドルフィンホールでラヴィ・チョプラ SWYAA インド会長の挨拶、SWYAA インドによる船上オリエンテーションが行われた。

その後、ケララ州政府主催の昼食会が開催されるタジマラバーホテルに移動した。伝統的なダンスが披露され、昼食が提供された。

午後はフリータイムが予定されていたが、昼食会の時間が長引いたため、予定より短く1時間程度の市内自由行動となった。

夜は船上レセプションが開催された。馬場誠治在チェンナイ日本総領事及びインド政府青年スポーツ省青年局次官 A.K. ドゥベイ博士が挨拶をされた。続いて、参加青年代表として南アフリカのナショナル・リーダーであるリン・アダムス氏が挨拶をし、駒形健一管理官より乾杯の発声が行われた。

参加青年は、在チェンナイ日本総領事館職員及び現地関係者等多数の出席者と懇談し、インドでの国際交流や過去の経験等について、知見を深める機会となった。

2月12日はコチ科学技術大学を訪問した。始めに講堂において、大学側からの挨拶と全体の概要説明があり、その後はコース・ディスカッションごとに場所を移し、それぞれコチ科学技術大学のコーディネーター及び学生とディスカッションを行った。各コース・ディスカッションの内容は以下のとおり。

■ CR コース

CR コースでは、参加青年主導により六つのグループに分かれて現地大学生とディスカッションを行った。内容はグループごとに異なり、自らの子供時代の困難や経験を共有し合うものから、各国の子供に関する制度比較を行うものまで幅広く用意されていた。各自が興味のある班に加わって議論していたこともあり、盛り上がり時間が足りない程であった。子供の置かれた現状が国ごとに違っていたため、いずれのグループにおいても新しい発見があった。また特筆すべきは現地大学生の積極的なコミュニケーションのおかげで参加青年たちが大いに触発されていたことである。

■ DI コース

DI コースでは、約 20 人の学生が迎えてくれた。まず、全体を三つのグループに分けて、ジェンダーに関する各国の状況を共有するところからディスカッションが始まった。議論は、女性の教育やキャリア、中絶の問題から多様な性の在り方にまでおよび、時間が足りなくなるほどお互いの国の状況から学び合い、ディスカッションは大いに盛り上がった。

■ DRR コース

DRR コースでは、コチ科学技術大学の Dr. Asha A.S. 助教授及び学生たちが出迎えてくれた。ディスカッションを始めるに当たり、まず参加青年からインド人学生へ各国の災害事情について紹介し、次に災害及び防災活動の定義を全員で確認してから、小グループに分かれてディスカッションを行った。自然災害はもちろん人為災害への取組も含めてインドの現状や学生らの考えを聞くと同時に、インド人学生からも各国

の実情について様々な質問を受けた。さらに、青年リーダーとして今後の抱負についても語り合うなど、活発な意見交換が行われた。

■ EMP コース

EMP コースでは、コチ科学技術大学の30人の学生に歓迎された。参加青年と現地学生との混合チームはリラックスモードで自己紹介から始まった。参加者は、「自信」「女性のエンパワメント」「お互いの国に対する理解」についてのアイデアを共有した。今回の主な収穫は、「何かを知らなくても大丈夫だ」ということだった。つまり、分からない(知らない)という事実を用いて好奇心や共感を奨励することによって、人は人、場所、事実とより深く結びつき、自分や他人に力を与えられるようになることである。

■ IC コース

IC コースでは、参加青年と留学生を含むおよそ25人のコチ科学技術大学の学生は八つのグループに分かれた。そして、グループごとに17の持続可能な開発目標(SDGs)の各内容について、言葉を使わずに演じ、他のグループの人が当てるというゲームを行い、SDGsの内容について楽しみながら理解を深めた。その後、参加青年が事前課題で作成したポスターを見せながら国際協力活動について発表し、大学生と互いの国際協力活動の経験について意見を交換した。短い時間ではあったが、現地大学生と交流する貴重な経験となった。参加青年からは、「コチ科学技術大学の学生と互いの経験や国際協力について話をする素晴らしい機会だった。もっと時間があれば良かった」というコメントがあった。

■ LD コース

LD コースでは、参加青年と現地大学生は四つのテーマ別のグループに分かれた。一つ目は栄養学で、各国の料理と食生活(特にインド料理)について話し合った。全ての話題に共通したことは、伝統的な栄養価の高い食品からファストフード(利便性、加工食品、パッケージ食品)への食生活の変化は、糖尿病、肥満、心臓病などの生活習慣病に拍車をかけていることである。二つ目は健康政策で、タバコ規制と母子保健の政策について議論した。三つ目はメンタルヘルスで、インドでは、メンタルヘルス障害はタブーであり、一般的には議論されていない。このため個人がケアと治療を求めることは難しいのが現状である。四つ目は食料安全保障と栄養不良で、各国の農業システムについて話し合われた。農業の安全を確保するために政府だけが責任を負うべきかどうか、あるいは国民がイニシアチブをとることができるかどうかについて、実りあ

る議論をした。

■ SD コース

SD コースでは、参加青年から「世界青年の船」事業及び本コースの説明が行われた後、小グループに分かれてコチの社会問題についてディスカッションを行った。コチ科学技術大学の20人の学生がゴミ問題や交通渋滞の現状を発表し、それに対するビジネスモデルが議論された。参加青年からはコチの現状を聞き、皆で対策案を共に考えることができたので、大変貴重な学びの時間であったというコメントがあった。

コース・ディスカッション終了後、再び講堂に戻り、各コース・ディスカッションの振り返り報告を参加青年及び現地大学生等から行った。また、昼食を同大学でいただいた後、午後は各国の文化を披露する、ミニ・ナショナル・プレゼンテーションを行った。

夜は午後7時よりクラウンプラザホテルにおいて、インド政府青年スポーツ省青年局次官であるA.K.ドゥベイ博士主催の夕食会が開催され、伝統的なダンス、楽器の演奏、歌の披露が行われた。

13日は、8箇所に分かれて課題別視察を行った。参加青年は8箇所の訪問先から希望の場所を選んで行くことができた。各課題別視察先の活動は以下のとおり。

SHG Kudumbashree

この機関は新しいビジネスのアイデアの開発を通じて、女性の社会進出の手助けをしている。弱い立場に置かれている女性に、人生を成功させるための新しい道筋を見付けさせることを目的としている。これらの女性たちが置かれているコミュニティでは、最低限必要とされるサービスさえも備えられていない場合が多い。これは社会問題であるが、一方で、社会変化への好機であるともとらえられている。

お話をくださった所長と地元の女性によると、インドで生きる女性だからこそ向き合わなければならない問題は多く、また、現在インドは、富裕層と貧困層の格差が広がり続ける変化の局面に直面している。女性問題への取組こそが、国際社会が発展途上国に求める難問を解決へ導くものであり、この施設への見学は、わたしたちにとってこれらの問題を考える良いきっかけになった

Snehanilayam Special School

学校に到着すると生徒が迎えてくれた。その後、学校紹介のビデオを視聴、授業見学を行った。今回見学した授業は英語、歴史、工作などであった。どの授業も

温かい雰囲気の中、先生が丁寧に指導し、日本に近い授業の進め方を感じた。また、教室や廊下は、よく整備されていた。最後にセレモニーが行われ、生徒による伝統的な音楽やダンスの発表が行われた。

今回の施設訪問を通して感じたことは二つある。一つ目は、障害の程度が比較的低い子も多く存在したことである。二つ目は、授業内容が生徒のレベルに対して低く設定されていることである。これらから、インドの特別支援教育の課題を知ることができた。

Don Bosco Sneha Bhavan

Don Bosco は子供たちの精神的なサポートを提供する施設である。主に心理的な問題や、問題行動又は感情的な問題がある子供について、家族の有無にかかわらず、5歳から受け入れている。

参加青年は子供たちが演奏する伝統的な打楽器で迎えられた。初めに施設の職員の方から、このセンターの概要説明を受け、132か国で235もの施設が展開されていることを知った。また、この事業の目的・ミッション・今後の計画の説明をスライドで学んだ。

また、児童結婚・性的虐待・暴力・ストリートチルドレン・HIVなどの諸問題における取組の成功例について聞いた。この事業は政府の力を借りず、コミュニティの支援を受けている。

残りの時間で参加青年はサッカー、折り紙、メキシコの伝統的な遊びを子供たちと共に楽しんだ。子供たちはアクティビティを非常に楽しんだようであり、参加青年にとっても有意義で素晴らしい経験となった。

ENS Kalari Centre

ENS カラリ・センターという道場を訪れ、カラリパットという地元に伝わる伝統武術の知識と技術を学んだ。その施設で、ケララ州発祥のカラリパットの歴史と、様々な技を体験した。

ENS カラリのグルは、4000年以上もの歴史を持ち、世界で最古とも言われるこの武術を参加青年に指導した。また、グルはインドの神話と武道の関係について、この武術の父とも言われているシバ神にまつわる話とともに紹介した。

説明の後、この道場の生徒が様々な武道の技とそれにかかわる正しいプロトコルをデモンストレーションした。その後、参加青年は靴を脱いで施設の中に入り、様々な技や武器を用いた戦いのデモンストレーション

を見学した。その後、武器の使い方も学び、すばらしい時間を過ごすことができた。

Adarsh Charitable Trust

Adarsh Charitable Trust では1998年の創設以来、知覚障害、ダウン症、自閉症などの症状を持った子供たちが、彼らの優れた個性を伸ばすための特別な訓練を通して社会に出た時にそれを最大限生かせるように日々様々な努力を重ねている。同施設では心理療法、感覚リハビリテーション、聴覚訓練、読み書きの訓練、身体を動かす訓練などを導入し、一人一人の生徒に最適な訓練を提供することを主眼に置く。施設には現在150人以上の子供が通っており、クラスは個人の能力の発達具合によって分けられていた。訪問の最後に子供たちが歌とダンスをそれぞれ披露してくれた。彼らの美しい表現に会場の誰もが感動し心を洗われるような気持ちになった。

Kerala Kathakali Centre

インドの伝統舞踊を観るためにケララ・カタカリ・センターを訪問した。カタカリは舞踊と演劇と音楽が融合されたもので、日本の歌舞伎に似ているようだった。始めにカタカリを特徴付けるメイクや演技の説明を受けた。踊り手のメイクの材料は水やココナッツや米など自然由来の材料を使用していた。目の中に植物の種を入れており、目を赤くさせる演出を行っていた。太鼓や歌や貝などの楽器により演奏された曲に合わせて、踊り手が目、口、首、眉毛を動かし表情の変化やジェスチャーをしており、語り手がその意味を説明していた。全て男性が演じており、大きな動きやダンスはないものの表情や身振りの表現の豊かさに感銘を受けた。

Amrita School of Business

訪問した日が祭日だったため、大学に到着すると、聖職者が礼拝を終えるのを待たなくてはならなかった。次に大学からのリクエストにより、参加青年は現地生徒及び地元の子供たちに「世界青年の船」事業についてのプレゼンテーションをし、インドの印象について話した。その後、世界平和と友愛についてのお話を聞き、次の瞑想ではフルートの音色を聴きながら心を落ち着かせることができた。

リフレッシュメントとして大学の職員からココナッツをいただいた後、小グループに分かれ、世界各国で実践されているビジネスの手法と、ヒンドゥー教の教えを実用的に取り入れたビジネスについて学生と話したことにより、コチのビジネス、文化について理解を深める良い機会となった。最後に隣接したヒンドゥー教のお寺を訪れた。

Kerala University of Fisheries and Ocean Studies (KUFOS)

ケララ海洋大学では初めに大学紹介とケララの海洋に関する講義を受けた。その後、ココナッツを頂きながら、大学の様々な施設見学を行った。

1. 学生が捕獲した様々な種類の魚を見学できる水族館
2. 大学が所有する船の模型や伝統的な漁方法を展示したミュージアム

3. 獲った魚を調理する施設
 4. 様々な魚を飼育する水槽で餌やり体験
- これらの施設を学生に案内され見学した。各参加青年が自国の海洋事情と比較しながら積極的に質問をした他、お互いの日常生活について話が盛り上がるなど非常に意義のある視察となった。

参加青年の感想 (アンケートより抜粋)

Q1. インドの訪問国活動での一番の学びは何でしたか？

- インドでの生活や文化を垣間見ることができ、十分に楽しむことができた。(南アフリカ)
- 大学でのディスカッションでの学びは多かったが、課題別視察同様に時間が短かった。(ポーランド)
- 課題別視察は女性のエンパワメントについて学び、課題と解決法を共有する素晴らしい機会であった。(日本)
- 現地の方のシンプルで楽しい人生の過ごし方を知ったのは一番大きな学びであった。他の人とどの様に協力し合うか、そして他人をどうやって助けるかを学ぶことができた。また、食べ物も文化体験の重要な部分である。インドは、食を通して文化を発信していると感じた。(スリランカ)

Q2. コチ科学技術大学でのディスカッションプログラムに満足しましたか？一番の学びは何でしたか？

- とても満足している。ディスカッションをリードできたことは楽しく、ディスカッションが自然に展開したことが興味深かった。(オーストラリア)
- 地元の学生と話をする時間が持てたことに満足した。素晴らしいファシリテーターがいたので、参加青年と地元の学生の両方から意見を聞くことができた。(日本)
- ディスカッションの時間がもっと必要だと感じた。(スリランカ)

Q3. 課題別視察に満足しましたか？一番の学びは何でしたか？

1. SGH Kudumbashree
 - 女性の存在が社会にとってとても重要であり、国の発展のために政府に貢献できることを学んだ。(オマーン)
 - Kudumbashree に所属する女性が周りを変えようと共に働く姿がすばらしかった。(モザンビーク)

2. Snehanilayam Special School

- スタッフは障害のある学生のために、そしてそのような学生と働くためにとってもよく訓練され組織されていた。一番重要であったのは、気持ちをこめて働いていたことである。特に、様々な職業訓練を実施し、素晴らしい結果を出していることが良いと感じた。(モザンビーク)
- インドにおける障害を持った人々への教育が、予想していたよりも発展していたことを知った。一方で、公教育から切り離されている点では、インクルーシブな教育はまだまだ遠いのかもと考える。(日本)
- 日本の特別支援学校に似ている。しかし、詳細は異なる。特別支援学校について学ぶ機会となり、良かった。(日本)
- 障害を持つ子供に会うのは初めてであり、とても素晴らしい時間であり、良い機会だった。生きることや、幸せについて考えさせられた。障害があるのは悪いことではなく、ユニークな特徴の一つではないかと考えた。(日本)

3. Don Bosco Sneha Bhavan

- 今まで一度も組織名を聞いたことがなかったが、世界中に支部があることを知った。スタッフは歓迎的であり、子供たちも私たちの訪問をととても喜んでくれたことは、とても美しかった。(オーストラリア)

4. ENS Kalari Centre

- 武道について教えていただいている際、文化の深い部分を共有できたことで、とても感情的になった。教えていただくことで、我々もその文化の一部になった感じがした。(スペイン)

5. Adarsh Charitable Trust

- 障害のある人も社会の一部である。アダルシュ・トラストはこの分野でとても良い仕事をしている。障害児も変革を起こせるということを学んだ。(インド)

6. Kerala Kathakali Centre

- ケララ・カタカリ・センター訪問は素晴らしい体験となった。カタカリ舞踊について学び、それと関連した現代の歴史について知ることができた。(インド)

7. Amarita School of Business

- 違うアイデアを持っている人と一緒に座ると、ビジネスやホスピタリティの在り方について学ぶことができる。(オマーン)
- 残念ながら学生たちとは数分しか話ができなかったが、彼らはヒンドゥー教の道徳をどのようにビジネスに当てはめるかを説明しようとしてくれた。(スペイン)

8. Kerala University of Fisheries and Ocean Studies (KUFOS)

- 海は我々全員にとって大切であり、守るべき重要なものである。また、新しい魚の製品の開発や、海の自然状態を様々な方法で調べることも大切である。(ポーランド)
- 知識を共有するととても素晴らしい機会であった。様々な技術や方法を学んだ。スリランカとインドの漁業の違いや共通点について学んだ。(スリランカ)

Q4. インド (コチ) における訪問国活動についてコメントを書いてください。

- インドという国について、イメージが変わった。実際に現地の学生と話したり、街中を歩く中で、多様性を感じる場面が多々あり、思っていたよりも自由でゆったりとした印象を受けた。(日本)
- 可能であれば、地元の学生を船に招待するべきであった。そうすればディスカッションなどをしてより交流を深めることができたであろう。(日本)
- 寄港地活動は素晴らしいものであった。食べ物や文化の表現方法もすばらしかった。また、SWYAA インドによるボリウッド・ナイトはすばらしく、課題別施設やコチ科学技術大学でのディスカッションもよく計画されていた。(インド)

- 寄港地活動については、今の気持ちを言葉では説明することは難しい。人生で忘れることができないほどのとてもすばらしい経験であった。歓待していただき、まるで自国のモザンビークにいるように感じた。(モザンビーク)
- フリータイムがもう少し必要であったと感じた。そうすればお金を使うことで地域経済に多少なりとも貢献できたのではないだろうか。また、もう少し観光者向けの場所にも行けたのではと感じた。(南アフリカ)
- 将来の事業では、ローカルな地域の家庭を訪問できればより良い学びになると思う。(南アフリカ)
- この事業が日本政府とインド政府の外交の一部であると改めて感じた。だからこそ、大学や施設、すてきな歓迎パーティーに参加することができたと感謝している。(日本)
- ホームステイかホームビジットがあればより良い経験になっていたと思う。外国参加青年が日本でホームステイしたように現地の様子を知るには現地の人ともっと触れ合う機会があれば良かった。(日本)
- 全てが面白い経験であった。大学で話をした学生が全員ITを学ぶ学生ではなければ、より良い体験となったと思う。そして、もう少し長いフリータイムが欲しかった。(オーストラリア)
- 地元の人々、政府の方、そしてインド青年とすばらしい時間を過ごした。インド文化、ダンス、食事、そして伝統文化の一部を体験できたのは、大変楽しかった。(ポーランド)
- この事業ではケララ州では三日間を過ごした。私の知る限りではケララ州はインドの神の島と言われている。ケララ州の文化を知ることができとても幸運に感じている。インドの一部でしかなかったにもかかわらず、素晴らしい多様性を感じた。(スリランカ)

スリランカ (コロンボ)

2月15日(木)	
9:00	コロンボ港入港
9:00 - 9:30	岸壁にて歓迎セレモニー (管理官及び各国 NL)
9:30 - 10:30	入国手続き 管理部・受入国政府・大使館・SWYAA 代表者ミーティング
10:30 - 11:00	SWYAA スリランカによるオリエンテーション
11:00 - 11:30 11:30 - 12:00	プレス・カンファレンス (代表者のみ) プレスの船内見学
12:00 - 12:20	大統領表敬訪問 (管理官及び各国 NL)
11:30 - 17:00	フリータイム
17:00	帰船
19:00 - 21:00	船上レセプション
2月16日(金)	
9:00	出発
9:30 - 12:00	コロンボ大学訪問 ・大学概要説明 ・コース別ディスカッション
12:30 - 13:30	昼食 (首相府 Temple Tree)
14:00 - 17:30	課題別視察 - Sri Lanka Women's Development Services Cooperative Society Ltd. - Thidora Theatre - HelpAge Sri Lanka - Ape Gama - Department of Ayurveda, Ministry of Health, Nutrition and Indigenous Medicine - National Gem and Jewelry Authority - Mithuru Mithuro Movement - Centre for Drug Rehabilitation and Human Values Development - Sri Lanka Volunteers Association - Sri Lanka Federation of Youth Clubs - Independent Television Network
18:00 - 19:30	夕食 (船内)
19:30 - 22:00	SWYAA スリランカ主催 スリランカン・ナイト (岸壁にて)

2月17日(土)	
9:00	出発
10:00 - 12:00	スリランカ国家青年サービス評議会 (NYSC) 訪問 - 文化交流 (ミニ NP)
12:00 - 13:00	昼食
13:30	スリランカ国家青年サービス評議会 (NYSC) 出発
14:30	帰船
14:30 - 15:30	オープンシップ準備
15:30 - 16:00	オープンシップ
16:00 - 18:00	出国手続き
18:00	出航

2月15日9時、コロンボ港到着時には、レッドカーペットが岸壁に敷かれ、管理官及び各国ナショナル・リーダーが温かい歓迎を受けた。歓迎時には、民族衣装を身にまとった方々やダンサーより花束を贈呈された。歓迎の集合記念写真を撮影し、帰船となった。

歓迎セレモニー終了後、地元メディア向けのプレス・カンファレンスが実施され、管理官、日本ナショナル・リーダー及びサブ・ナショナルリーダー、スリランカのナショナル・リーダーが代表で参加した。管理官及びナショナル・リーダーより挨拶と感謝の言葉が述べられた後、地元の政府関係者からもメディア関係者に対して話が行われた。

スリランカの方々からの温かい歓迎は、訪問国活動のすばらしい始まりとなった。

午後はフリータイムとなり、参加青年は自由にコロンボ市内を散策した。

午後7時、日本政府主催の船上レセプションが開催された。来賓として菅沼健一在スリランカ日本特命全権大使、プディカ・イッダマルゴダ SWYAA スリランカ会長、エランディカ・ウェリアンゲ NYSC 会長が出席された。

翌日16日は、コロンボ大学を訪問した。始めにコロンボ大学学長からご挨拶をいただき、各NLへの記念品贈呈及び記念撮影があった。その後、各コース・ディスカッション場所に移動し、コロンボ大学の学生とディスカッションを行った。各コース・ディスカッションの内容は以下のとおり。

■ CR コース

現地学生の主導によりディスカッション・セッションが運営された。配られたカードの色ごとに七つの班に

分かれて、それぞれの班にコロンボ大学の学生がファシリテーターとして加わった。時間の半分はお互いを理解し合うためのアイスブレイキングやゲームに費やされた関係でディスカッション自体には深みを出すことが難しかった印象だが、子供の権利の概要についてのプレゼンテーションや国際条約についての知識を得ることができたのは大きな収穫であった。また、スリランカの参加青年とは異なる現地の青年の口から直接本国の現状を聞くことができたのは、訪問国活動ならではの体験となり好評であった。

■ DI コース

7人の現地学生がディスカッションのテーマを準備して迎えてくれた。各グループに現地学生が一人ずつファシリテーターとして入り、参加青年たちは、ジェンダーをテーマとして取り上げ、女性のエンパワメントについてディスカッションを行った。男女平等を推進するに当たり障壁となりうる宗教や社会的階級の関連性など、スリランカの現状についてディスカッションを通して学んだ。

■ DRR コース

法学部の学生たちによりアクティビティが用意されていた。まず、災害と関連した映画の題名をジェスチャーで当てるアイスブレイキングを行った。次に、スリランカにおける災害の種類についての説明、および主な防災・減災用語とその概念を確認した後、災害に直面した際にとるべき行動について寸劇形式でディスカッションを行った。数名の参加青年がチームとなって即興劇を演じ、それを見ている他の青年達がコメントを差し挟むことでストーリーに介入し、演じる青年達は、それに応じてシナリオを柔軟に展開させながら、災害時の対処行動を劇中で変化させていくというもの

あった。最後に、劇中の展開を振り返り、これまでのコース・ディスカッションでの学びを投影しつつ、しかるべき行動について皆でコメントを出し合った。非常にクリエイティブな手法であり、全員が楽しみながら参加し、学びや気づきを深めることができた。

■ EMP コース

35人の参加青年が、大勢の学生に迎え入れられた。参加青年は、現地学生とともに二つのグループに分かれ、コミュニケーションに関するゲーム(明確なコミュニケーションを強調するゲーム)を行った。参加青年は、伝統的なスリランカ武道に関する映像や、モチベーションビデオを見て、その後、メンタルを鍛えるパズルにいくつか取り組んだ。コロombo大学の滞在時間は短いものであったが、自分自身をエンパワーするために、自分が何を知らないのかということを理解する必要があるという認識を共有することができた。

■ IC コース

大学の国際関係を学ぶ学生12人と参加青年で国際協力の定義について話し合った後、三つのグループに分かれ、世界の貧困、教育問題、温暖化についてロールプレイや歌などを通し、クリエイティブに発表し、国際協力に関する課題への理解を深めた。人数が多かったにもかかわらず、滞在時間が短かったため、地元の学生と十分に意見を交換することができなかったことが心残りではあったが、参加青年にとっては地元の学生と触れ合う楽しいひと時となった。

■ LD コース

参加青年は現地学生と共に四つのディスカッショングループに分かれて議論を行った。スリランカでの飲酒・喫煙や、若年層のSNSにかかわるメンタルヘルス、コンピュータを使うオフィスワークの職業病や、それぞれの国の料理の栄養や食習慣についてディスカッションを行った。とりわけスリランカの事例を学びながら、各国の参加青年が現地学生と議論を行い、学びを深めることができた。

■ SD コース

法学部の学生8人によるスリランカの国説明及び持続可能な企業のプロジェクト説明が行われた。続いて参加青年によるSWY及び本コースの説明があり、現地学生によるアイスブレイキングで交流を深めた。その後七つのグループに分かれ、スリランカの社会問題に対するソーシャルビジネスについて議論された。一つのグループからはスリランカの社会問題として貧困が挙げられ、これに対するソーシャルビジネスモデルとして小口融資が提案された。ディスカッションは20

分間と短く、参加青年からはもっと深く議論がしたかった、仲を深めたかったという声が多くあげられた。

コロombo大学でのディスカッションの後、全員、テンブル・ツリー(首相府)へ移動し、昼食をいただいた。ラニル・ウィクラマシンハ首相がお出ましになり、各テーブルを回って、ナショナル・リーダーや参加青年と会話をされた。

午後は10箇所に分かれて課題別視察を行った。参加青年は10箇所の訪問先から希望の場所を選んで行くことができた。各課題別視察先の活動は以下のとおり。

Sri Lanka Women's Development Services Cooperative Society Ltd.

Women's Development Services Cooperative Society Ltd.(通称Women Coop)はスリランカに23の支部を持つ基金であり、女性だけで構成される。初めに参加青年は子供たちに歓迎され、施設に向かった。その後、ココナッツジュースを頂き、三つのグループに分かれて施設見学を行った。各支部5~15人で活動を行うこの団体は、週に1回、全ての女性から5ルピーずつ徴収し、そのお金を人々に貸し出している。具体的な用途は①家の購入、②子供の教育費、③システム関係などである。参加青年は積極的に質問し、非常に有意義な時間となった。施設訪問の後にはスリランカの伝統的な食べ物を頂いた。また文化交流の場では、スリランカの女性が作る編み物の体験をした後、ソーラン節を披露して盛り上がった。

Thidora Theatre

Thidora Theatre訪問は大変すばらしいものであった。施設に入るや否や、参加青年はスリランカの人々の奏でるメロディーと踊りと共に温かく迎えられた。パフォーマーの女性が完全に聴力を失っていることにも驚かされた。部屋に誘導される際には、ダウン症を患っている人々によって作られたアーチをくぐった。セラピー治療を目的とした施設は、あらゆる障害のある若者たちが、五感、音楽、ダンスを通して感情的、精神的、心理的、そして肉体的に向上することを目指している。午後いっぱい、参加青年は、彼ら一人一人とダンス、歌、行進、そして笑顔を通じて交流することができた。テンポの良いダンスとエクササイズは運動神経と運動能力を刺激し、遅くゆったりとしたテンポは彼らをリラックスさせる。このような演劇セラピーにより、若者が楽しみ、幸せそうにしている姿を見ることはすばらしかった。

HelpAge Sri Lanka

HelpAge Sri Lanka(高齢者介護センター)は、高齢者に関する数々のサービスを提供する施設である。施設に到着した後、参加青年は代表者から施設とその活動に関する説明を受けた。スリランカでは、高齢者の9割以上が家族と暮らしており、在宅で介護をすることが一般的である。そのためこの施設では、高齢者と暮らしている世帯に向けた講演会や、高齢者と地域のコミュニティを繋げるワークショップの実施、医療や介護などのサービス、定年後の高齢者も社会に貢献できるような仕事を提供している。社会と切り離された施設ではなく、高齢者と社会の共存を目的としている活動をしている点が印象的だった。

Ape Gama

Ape Gamaは、伝統的なスリランカの村を再現した博物館である。ここでは、習慣、伝統、音楽、踊りや食べ物など、とても興味深い経験を行うことができる。参加青年はスリランカの文化や歴史に関してより深く学ぶことができた。大学教授によるスリランカに関する講義はとても面白く有意義であった。教授からスリランカは最も多様に溢れた国だということを学んだ。コロomboのような近代都市でさえ、過去と未来、そして伝統が融合した多様で豊かな社会を作り出している。参加青年はこの訪問を通して、スリランカとの強いつながりを感じ、更なる理解を深めるため、いつか再訪したいと感じているようだった。

Department of Ayurveda, Ministry of Health, Nutrition and Indigenous Medicine

施設は林の中にあり、そこに育つ多くの植物は療養に用いられるとのことだった。庭の空き地で8人ずつのグループに分かれ、防虫効果のある木や果物の木の植樹をした。施設内では館長によるアユールヴェーダの起源や特徴、どのように広まったかについての話、また、アユールヴェーダの概念をどのように日々の生活に取り入れられるか、という解説を聞いた。その後、研究所や療養所の見学を行い、また、施設で作られたお茶やワインを販売しているところも見た。訪問の最後には、地元のお茶と甘味をいただくなど、すばらしいおもてなしを受けた。

National Gem and Jewelry Authority

様々な種類の貴重な石を管轄している政府機関を訪問した。スリランカで最も誇りにしているものは、スターサファイア(スターランカ)という美しく魅力的な石である。

職員は非常に親切で好意的で、参加青年を紫色の花で

迎えてくれた。訪問の前半では、施設に関するワークショップがあり、その中で3人の職員のスピーチがあった。中でも最も重要な内容は、CEOのキスィシリ・ディサナヤケ博士によるスピーチであった。鉱山における労働環境、採鉱、そして川の調査について話した。参加青年はその話に変な興味を示し、多くの質問をした。

その後、特別室に移動し、二つの大きく大変貴重な宝石を見た。一つは390カラットもあるクリソベリル・キャッツアイで1170万ドルの価値があり、もう一つは有名なスターサファイアだった。参加青年は喜んでその宝石に触ったが、実は、施設の職員も触らせてもらえないほど高価なその宝石が運ばれてきたとき、2人の警察官が銃を持って警護していたほどだった。最後に軽食を頂き、訪問を終了した。参加青年にとってはすばらしく貴重な体験となった。

Mithuru Mithuro Movement — Centre for Drug Rehabilitation and Human Values Development

Mithuru Mithuro Movementは寄付によって成り立っているスリランカで最初の仏教の薬物更生施設である。プログラムでは、更生しようとしている麻薬中毒者がその体験を振り返り、仲間意識を醸成し、対話の機会を持ち、ビデオを通じて考えを共有する機会を提供している。

施設ではまず、伝統的なダンスで出迎えられた後、参加青年はMithuru Mithuro Movementの設立者であるレヴェレンド・ボディ氏から温かい歓迎を受けた。そして施設の重役や設立者から活動の内容、歴史、成功事例などについての話を聞いた後、実際に更生した人たちに話を聞く機会をいただいた。例えば、復帰する際に大変だった出来事や施設利用者の男女比率などを聞いた。施設利用者の経験談や麻薬中毒から更生する過程や、この施設やパートナーとして更生に協力したチームによる努力の結晶と言える功績を聞き、非常に感銘を受けた。

Sri Lanka Volunteers Association

スリランカボランティア連盟は、精神に疾患がありながら、家族の介護を受けられない女性の支援をしている。様々な活動をしなが、精神的又は肉体的な障害をなくすような、女性にとって安全な場所を提供している。

参加青年は連盟の歴史を学び、また入所者と支援に従事するボランティアの話聞く機会を得た。ボランティアの支援者は主に心理学に精通しており、世

界中から集まっている。彼らは数か月間連盟に滞在し、様々な経験を積んでいる。

この連盟が精神疾患のある女性を支援することには、二つの重要な意味がある。第一に、スリランカ社会の伝統的な考え方には、精神病にまつわる迷信や汚名があるからだ。第二に、スリランカの女性は伝統的に家族に依存する存在であり、とても立場が弱いからである。

Sri Lanka Federation of Youth Clubs

スリランカ・ユースクラブ連盟は1983年に設立された東南アジア最大の青年ボランティアネットワークである。毎年、青年の技術や才能の向上を図り、ナショナル・ユース・フェスティバル、ナショナル・ユース・アワード・フェスティバル、ナショナル・ドラマ・フェスティバルを実施している。

参加青年は役員とメンバーに温かく迎え入れられ、地区代表も交えたオープン・ディスカッションに参加した。参加青年は、組織の在り方、スリランカの青年が直面する課題、青年育成の状況や、青年育成の利点などについて話し合った。課題別視察は大変充実しており、参加青年はスリランカの青年の置かれている現状や課題、そして青年育成活動について学ぶことができた。スリランカ・ユースクラブ連盟が、青年に適切な助言を与えながら、スリランカの青年育成に貢献していることを知り、参加青年は大変感銘を受けた。

Independent Television Network

スリランカで最も有名なテレビ局の一つを訪れた。スリランカダンスで歓迎を受けた後、テレビ局内に入り、会社側の説明と質疑応答の時間を通じて、スリラ

ンカの報道の状況とシステムに対する理解を深めた。ITNの女性従業員の比率は50%ほどであること、また、ITNは複雑な撮影機械をスリランカで初めて導入した会社であることが分かった。スピーカーによると、近年はテレビよりSNSを利用した視聴方法の方が力を伸ばしているとのことだった。ITNは民放であり、エンターテインメントの分野に力を入れている。その後少人数のグループに分かれ、テレビの放送を操るコントロールセンター、実際に放送で使用されるスタジオ、過去の放送を保存しているライブラリコーナーを見学した。

2月17日午前、参加青年はスリランカ国家青年サービス評議会(NYSC)を訪れ、SWYAAのメンバーや現地の青少年に向けてミニ・ナショナル・プレゼンテーションを行った。参加各国の歌や踊りに加え、スリランカの伝統ダンスが現地の青少年によって披露された。全参加国のパフォーマンスが終わったあと、各国の参加青年がSWY30のテーマソングを合唱し、ミニ・ナショナル・プレゼンテーションは大盛況のうちに幕を閉じた。その後、SWYAAのメンバーや現地のボランティアとともに昼食をとり、NYSCの訪問はスリランカの現地の青少年とのすばらしい交流の機会となった。

午後は15時半から16時までオープンシップを実施し、スリランカ政府関係者、NYSC関係者、既参加青年、在留邦人、スリランカ参加青年の家族等、約300人が船を訪れ、にっぽん丸の見学を行った。また、事業受入関係者にとって、船内の様子を知ってもらえるすばらしい機会となった。

船は18時にシンガポールへ向けて出航した。

参加青年の感想 (アンケートより抜粋)

Q1. スリランカの訪問国活動での一番の学びは何でしたか？

- 人々の在り方。温かい歓迎とおもてなしから、心を開いて自分たちの文化を共有してくれようとする姿勢が伺えた。(ペルー)
- スリランカの人々はいつも笑顔だ。大学を訪問した際は、現地学生と子供の権利についてディスカッションし、新しい知識を得た。(オマーン)
- 学生と更に話をする機会や二つ目の課題別視察があれば尚良い。(オーストラリア)
- 大学生と話をする時間が少なく、歴史や現状、文化や人々について学ぶ時間がなかった。(オーストラリア)

Q2. コロンボ大学でのディスカッションプログラムに満足しましたか？一番の学びは何でしたか？

- ディスカッションする時間をもっと多く取り、様々な解決策を導き出したかった。(スペイン)
- 現地の人とディスカッションを重ね、いろいろな物事の見方を比較する重要性を学んだ。(ペルー)
- 学生や現地の青年と話をする時間がもっとあるとよかった。(メキシコ)
- 時間が短く、もっと様々な話を学生とする時間があつた方が良かったと感じた。例えば、一緒に食事をする時間があれば、ディスカッションのトピック以外の話ももっとできたと思う。(Japan)

Q3. 課題別視察に満足しましたか？一番の学びは何でしたか？

1. Sri Lanka Women's Development Services Cooperative Society Ltd.
 - WOMEN'S COOPを訪れた機会に感謝したい。この団体の女性たちから、自国の団体の活動に活用できる情報を得ることができたことがありがたかった。(南アフリカ)
2. Thidora Theatre
 - 音楽療法の修士号を取得したいと思っていたため、この演劇療法の学校は私自身が勉強したいと考えている分野にとっても近いと感じた。本当にすばらしく、どの様にすれば子供や10代の若者の人生を変えられるかを見ることができたのは、とても感動的だった。(メキシコ)
3. HelpAge Sri Lanka
 - スリランカは高齢者をとても大切にしている、定年退職後も医療的サポートだけでなく、スキルを活かすことで社会に貢献できるような取組をしていた。日本は年をとることにマイナスの印象が強

いと感じていたので、スリランカにおける高齢者に対するポジティブな捉え方はすばらしいと思った。(日本)

4. Ape Gama

- Ape Gamaでのプレゼンテーションはすばらしく、歴史や文化に対する知見を深めることができた。(メキシコ)

5. Department of Ayurveda, Ministry of Health, Nutrition and Indigenous Medicine

- ペルーにも伝統的な薬があるが、スリランカほど重要視はされていない。ペルーもスリランカに見習い、このような知識に価値を見いだすべきだ。(ペルー)

6. National Gem and Jewelry Authority

- スリランカの人々の誇りである、様々な種類の原石を見ることができたのは面白かった。(南アフリカ)

7. Mithuru Mithuro Movement

- 温かく迎え入れられた。麻薬中毒経験者の話を聞いたのは印象的だった。しかし、NGOの事務所で話を聞くだけではなく、実際の施設に行くのだと思っていた。(南アフリカ)
- 瞑想のやり方や更生させる方法について学べるともっと良かった。それ以外はすばらしかった。(スペイン)

8. Sri Lanka Volunteers Association

- 彼らの思いやりと他人を助けようという意思、そして障害のある人々への対応はすばらしかった。(ペルー)
- すばらしいマネジメントと女性のエンパワメントの仕組みである。(インド)

9. Sri Lanka Federation of Youth Clubs

- ユースクラブのメンバーやボランティアの人達が、フリータイムのガイドから会話の中でのスリランカについての話など本当にたくさんのことを教えてくれたし、短い時間だったのに、家族のように接してくれたことがとても嬉しかった。(日本)
- スリランカの青年のモチベーションを上げるシステムがある。青年クラブは良い例だ。(オマーン)

10. Independent Television Network

- ジャーナリズムの分野で働いているため、異なる分野のネットワークが様々なリソースを使うと、どのような働きができるかを見ることができたのはすばらしかった。(オーストラリア)